地域交流牧場全国連絡会20周年記念誌

DFニュース特別版

仲間とだからできたこと

―口蹄疫や震災を乗り越えて、次の世代に繋ぐ―

令和元年度

まきばっこ

令和2年3月●日発行

地域交流牧場全国連絡会

〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町 2-6-1
堀内ビルディング 4 階（一社）中央酪農会議内
TEL：03-6688-9841
FAX：03-6681-5295

CONTENTS

02 会長からのことば

03 歴代会長・副会長名簿・会員数
地域交流牧場全国連絡会（交牧連）とは
……活動の目的/会員数/柱となる活動

04 交牧連設立の経緯

05 交牧連設立から10年間の活動

07 10周年から10年間の活動
……トピック１　東日本大震災復興支援事業のあゆみ
……トピック２　クラブ・ユース事業のあゆみ

13 地域ブロック活動の紹介

15 今後の10年に向けた宣言

会長からのことば

地域交流牧場全国連絡会会長
渡辺 隆幸
（有）渡辺体験牧場

令和元年度、地域交流牧場全国連絡会の発足から20年を迎えました。熱い思いを持った自立心の強い酪農家たちが集まり、平成11年に設立された本会は、日本酪農の発展に資するべく、時代に沿いながら、消費者への国産牛乳乳製品の重要性の啓発や、酪農教育ファーム活動、震災復興支援、後継者育成、家畜防疫対策、地域貢献など、様々な活動を行ってきました。

これらの意義ある活動を振り返るとともに、設立20年を記念して、令和元年10月24日に「20周年記念式典」を北海道釧路にて開催いたしました。直近10年間に焦点をあて、国内情勢とともに本会活動を振り返りながら、地域ブロックの特色ある活動などを発表いただき、最後には若手会員からの力強い宣言がなされて幕を閉じました。次の30年目、40年目を迎えるにあたり、私たちがどのような心構えで何を繋げていくかを確かめ合いながら、笑いあり・涙ありの、素晴らしい式典となりました。会員の活動や思いが凝縮されたこの式典で参加者の皆さんと共有した10年間の内容や、本会の基本的なデータなどを記録として残すため、20周年記念誌を公刊いたします。

これまで私たちの行ってきた活動や、各牧場での酪農教育ファーム活動の取り組みは、たくさんの方に届いています。その力は大きくなり、やがて必ず自分たちのもとに帰ってきます。素晴らしいことを私たちは行っていると、自信を持っていただきたいと思います。10年後も、20年後も続けていきましょう。ここから地域交流牧場の未来が始まります。これからも、みんなでともに歩んでいきましょう。

歴代会長・副会長名簿・会員数

年度	会長 氏名	会長 所属		副会長 氏名	副会長 所属		副会長 氏名	副会長 所属		会員数
H11	横尾　文三	ヨコオ牧場	九州	湯浅　優子	湯浅ファーム	北海道	北島　一夫	北島牧場	関東	130
H12										202
H13				広瀬　文彦	リバティヒル広瀬牧場	北海道	伊藤　立	デイリーパラダイス	北陸東海	218
H14	広瀬　文彦	リバティヒル広瀬牧場	北海道	安富　聖二	（有）安富牧場	近中四				230
H15										231
H16				浦田　健治郎	由布院・うらけん牧場	九州				241
H17				藤川　修	（有）藤川牧場（しおのえふじかわ牧場）	近中四				248
H18										244
H19							鈴木　トモ子	山の牧場	九州	253
H20				藤田　毅	（有）フジタファーム	北陸				287
H21	藤田　毅	（有）フジタファーム	北陸	吉田　恭寛	吉田牧場 牧場のログハウス「ちちぶ路」	関東	広野　正則	（有）広野牧場	近中四	299
H22										314
H23										311
H24										286
H25	広野　正則	（有）広野牧場	近中四				清水　ほづみ	清水牧場	東海	294
H26										289
H27	清水　ほづみ	清水牧場	東海	安原　栄蔵	ABITANiA ジャージーファーム	東北	花房　享一郎	フラワーステーションファーム花房牧場	近中四	299
H28							渡辺　隆幸	（有）渡辺体験牧場	北海道	309
H29	渡辺　隆幸	（有）渡辺体験牧場	北海道				砂流　裕美子	砂流牧場	近中四	312
H30										309
H31				加茂　太郎	（株）加茂牧場	関東				313

※所属は当時のもの

地域交流牧場全国連絡会（交牧連）とは

活動の目的

酪農生産者同士が交流・意見交換する場をつくり、都市生活者や地域住民との交流活動や教育的活動を進めていくことにより、日本酪農に対する理解や支援を獲得する。

会員数

313人（令和元年５月時点）

柱となる活動

全国的なネットワークを活かした相互研鑽や交流【つなぐ】

本会の全国的なネットワークを一層強固なものとするため、会員の活動の充実・深化に資するテーマを設定し、年に１度地域ブロックの持ち回りで全国研修会を開催。

また、全国７地域のブロック（北海道・東北・関東・北陸・近畿中国四国・九州）に分け、地域貢献の観点から生乳生産者や農協等と連携し、ブロック活動を行う。消費者と直接交流する場を設ける等、酪農教育ファーム活動や（一社）中央酪農会議が展開するミルクジャパン運動を積極的に推進することにより、酪農の持つ「教育力」を活用した食育活動等を行う。

さらに、本会の活動状況や会員情報などの発信を行なうため、会報紙「ＤＦニュース」の作成や、ホームページの運営、フェイスブック等のSNSを活用し、情報共有を図る。

酪農教育ファーム等の社会貢献活動【続ける】

東日本大震災及び熊本地震の被災地への支援について、未だ復興の途上であることを踏まえ、被災地域の児童への酪農体験（小学校等への出前授業）を継続して実施。

酪農後継者と酪農理解者の育成【育てる】

日本酪農の発展に貢献する観点から、クラブ・ユース事業を行い、後継者世代の育成を図る。

酪農家が集う勉強会やイベント等で新規会員募集パンフレットを配布・説明するなどして、新規会員の獲得を図る。

また、酪農教育ファーム等の社会貢献活動、酪農理解醸成のためのイベント等を通じて、酪農理解者を獲得・育成することに努める。

交牧連設立の経緯

本会設立の発端は、（一社）中央酪農会議が平成6年から行っていた「日本の牧場スタンプラリー」という取り組みだった。これは乳製品の輸入自由化も含む「ガット・ウルグアイラウンド交渉」において、諸外国からの市場開放圧力が高まる最中、消費者からの日本の酪農の生産現場への理解と支持を獲得することを目的に始まった。平成9年には、スタンプラリーに参加する酪農家の一部有志を中心に、より積極的な消費者の交流活動の推進と全国の交流型牧場間の連携を図ろうとする活動が始まり、平成10年に「全国消費者交流牧場連絡会（仮称）」発起人会を開催し、全国6ブロックで地域準備会を開催。

そして平成11年7月1日に、東京都内にて「設立総会」を開催し、「地域交流牧場全国連絡会」が設立された。地域での熱心な呼びかけにより、130もの牧場が加入した。

年度	和暦	西暦	月	内容
6	6	1994		**中央酪農会議で「日本の牧場スタンプラリー」開始** 生産者と消費者の直接的な交流活動による、生産現場への理解と支持の獲得が目的（当初51牧場が参加） ー乳製品自由化も含む「ガット・ウルグアイラウンド交渉」において、諸外国からの市場開放圧力が高まる最中ー
9		1997		**スタンプラリー参加牧場の一部有志を中心に、より積極的な交流活動の推進と全国の交流型牧場間の連携を図ろうとする活動開始** 「グリーンツーリズム」に対する関心の急速な高まりを受け、スタンプラリーの参加牧場も200超
10		1998	12	**「全国消費者交流牧場連絡会（仮称）」発起人会の開催** 15名の発起人のうち、12名が参加
			2～3	**全国6ブロックで「地域準備会」が開催**
11		1999	7	**設立総会開催⇩「地域交流牧場全国連絡会」設立**

■「日本の牧場スタンプラリー」開始

平成6年～11年までの6年間実施。参加牧場は295牧場となり、その半数程度が本会の会員となった。

2牧場のスタンプを押して応募すると、抽選で豪華景品が当たるという企画。応募総数は通算で38万通。

参加牧場にはスタンプ台やのぼり、応募用のペンなどが支給された。現在の会員牧場でこのスタンプ台が置かれている様子を目にすることも。

交牧連設立から10年間の活動

年度	和暦	西暦	内容
			全国活動の主な内容（新規事業を中心に記載）
11	11	1999	●「施設所有者賠償責任保険」設置
			●シンボルマーク「DF」作成
			●海外研修積み立て制度創設
			●PRパンフ「JOIN US」制作配布
			●新規就農円滑化モデル事業の活用を開始
			●「国内先進地事例視察」開催
			●機関紙「DFニュース」創刊
			●「第1回全国専門部会」開催
			●生産物責任賠償保険設置
			●「第1回海外研修」開催（英国・教育ファーム）
12	12	2000	●オリジナルツール作成を開始
			●ホームページ作成
			●「酪農教育ファーム認証制度検討委員」選出
			●「ファームフェスタ2000 in おかやま」出展
			●「酪農教育ファーム推進委員」選出
13		2001	●「牧場ガイドブック」作成

■シンボルマークの作成

「Dairy Farm」の頭文字「DF」をデザイン化したもので、PRパンフレットや機関紙、封筒などに掲示し活用することとなった。

■牧場ガイドブック作成

「牧場スタンプラリー」で作成していた「牧場ガイドブック」を交牧連で作成。

■「国内先進地事例視察」開催

交流活動を実施する会員の活動の支援のため、平成11年から乳製品製造や酪農教育ファームなどの国内の先進的事例の視察を年に2回開催し、それぞれ15～20名の会員が参加した。平成14年度からはこの企画に代わり、ブロック間の垣根を越えて広く全国の会員と交流することを目的に「全国研修会」が実施されるようになった。

●平成13年東北開催
飯田牧場視察

●平成13年東北開催
蔵王酪農センターチーズ研修

■機関紙「DFニュース」の発行

会員牧場の交流活動や、関連した法律改正・補助金制度の紹介、海外先進国情報の提供、会員間の情報・意見交換を目的として、平成12年1月に創刊号を発行。活動内容報告を中心に、設立からの歩みや今後の活動予定などを掲載した。形や内容はかわりつつも、これまで59ものDFニュースが発行されている。

■海外研修の開催

海外の先進的交流活動や牧場・施設を視察するため、平成12年～16年度の間、年に1回海外研修会を実施。希望者は本会で参加費を積み立てのべ60名が研修会に参加した。

海外研修の様子
⬅平成15年スイス

➡平成16年フランス

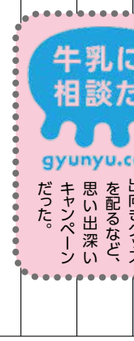
年度	訪問国	研修テーマ	参加人数
H12	イギリス	教育ファーム	7
H13	イタリア	ジェラート研修	17
H14	フランス	教育ファーム・グリーンツーリズム	14
H15	スイス	山岳チーズと風土を生かした酪農経営	13
H16	フランス	教育ファーム	9

10周年から10年間の活動

年度	和暦	西暦	月	内容
	14	2002		全国活動の主な内容（新規事業を中心に記載）
				●「第1回全国研修会」開催（NHK「ふるさとの食　にっぽんの食」への出展）
	16	2004		●「オープン ファーム デイ」実施
	17	2005		●「とちぎファームフェスタ2005」参加
				●オリジナルキャラクター「まきばっこ」作成
				●「牛乳に相談だ。（中央酪農会議）」協力
	18	2006		●「第1回新規会員研修会」開催
				●「第1回食育推進全国大会（大阪）」参加
				●「おいしい国産牛乳・乳製品フェア」協力
	19	2007		●地域ブロック事務局を指定団体等へ移管
				●「リーダー研修会」開催
				●「酪農教育ファーム特別専門委員会」開催（酪農教育ファーム認証制度の見直し）
	20	2008		●「乳製品製造技術研修会（中酪主催）」参加
				●「カウパレード.in丸の内」参加
				●「10周年記念誌に係る座談会」実施
	21	2009		●「食育推進全国大会（島根県）」参加
				●「10周年記念行事」開催
				●「10周年記念誌～牛とともに人とともに～」発行

■「牛乳に相談だ。」キャンペーンについて

中央酪農会議が牛乳消費拡大事業として始めたキャンペーン（平成17～21年度）。ターゲットを牛乳離れがとりわけ顕著な10代に絞り、牛乳の位置づけを「親しみのある存在」に高めるためにスタート。本会活動でもこのTシャツを着てイベントへ出向きグッズを配るなど、思い出深いキャンペーンだった。



■「第1回新規会員研修会」開催

入会3年以内の会員を対象として、本会活動の理解促進や活動に対するモチベーションの向上や会員間のコミュニケーションの形成などを目的として、第1回目を栃木県で実施。「地域交流牧場全国連絡会とは何か」の講演や、（有）那須高原 今牧場及び体験館"TRY"TRY"人見牧場の視察を行った。

■「リーダー研修会」開催

理事を対象とした研修会を東京都で実施。本会活動のねらいを共有し、個性を尊重した組織的なネットワークの構築などについてディスカッションを行った。22名が参加した。

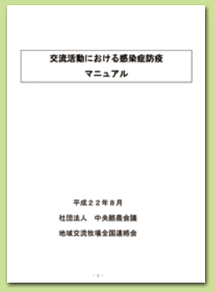
■「10周年記念行事」開催

設立10周年を記念し、これまでの10周年の取組み経過を踏まえ「～なごう、牛・人・未来～もっと知ってほしい私たち牧場のこと～」のスローガンを掲げ、記念行事の開催と記念誌の制作を行った。記念行事には約130名の会員・関係者が集い、盛大に開催された。記念誌には全国61会員が活動に対する熱い思いを寄稿した。

年度	和暦	西暦	月	内容
	22	2010	4	●口蹄疫発生
			6	●代議員会書面議決 「オープン ファーム デイ」中止
			8	●「交流活動における感染症防疫マニュアル」策定
			10	●MILK JAPAN運動と連携し「オープン ファーム デイ」実施
			2	●口蹄疫清浄国へ
			3	●東日本大震災発生
	23	2011	4	●東海・北陸ブロック分割
			9	●東日本大震災復興支援事業開始 ⬇第1回目となるもーもースクールを開催（宮城県石巻市立橋浦小学校）
			10	●家畜伝染病予防法の改正に伴う「飼養衛生管理基準」の大幅な見直し

■「交流活動における感染症防疫マニュアル」策定

宮崎県における口蹄疫の発生を受け、今後も交流活動を継続的に発展させるには、安全衛生対策に万全を期し、伝染症に対する防疫体制を構築することが重要と再認識され、専門家も交えたプロジェクトチームを中心に防止及び発生時の対応マニュアルを作成した。本マニュアルは酪農教育ファームの認証研修会での資料としても活用されている。



感染症防疫の基本は、感染の原因となる病原微生物を「持ち込まない」「広がらせない」「持ち出さない」を基本として、それぞれに対する具体的な防疫対策方法を「乳牛」「外来者」「車両」など対象別に記載。また、参考に「乳用牛における一般的衛生管理マニュアル」（農林水産省）なども掲載している。

■ミルクジャパン運動について

「牛乳に相談だ。」に代わり平成22年度に中央酪農会議が始めた牛乳定着化・地域支援事業「MILK JAPAN」。「牛乳が日本を元気にする」をスローガンに展開しており、本会としてもオープンファームやイベントの開催に協力してきた。

■「オープン ファーム デイ」実施

平成16年度からスタートした、会員が一斉に牧場を消費者に開放する「オープン ファーム デイ」。

平成22年度には「MILK JAPAN」と連携し、10月9～11日の3日間に実施し、全国217牧場が参加。本会では、オープンファームデイののぼりを作成し、積極的に活動に参加。

トピック①

■東日本大震災復興支援事業のあゆみ

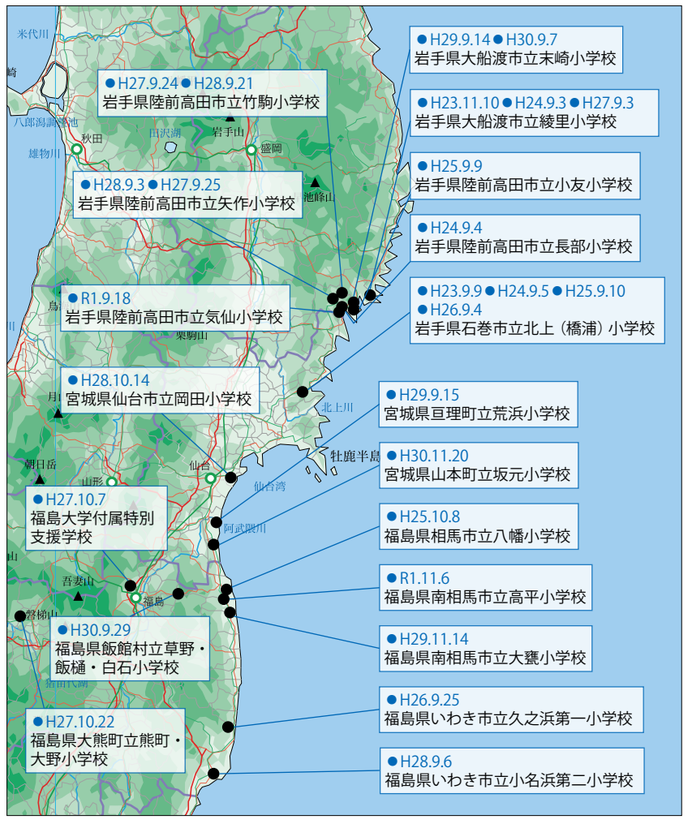
東北・関東地区を中心とし甚大な被害をもたらした東日本大震災。震災の影響により酪農の継続が困難になった会員もあった。そのような状況のなか、全国の会員からの多数の意見を受け、平成23年度の代議員会において、震災からの復興・復旧のための支援事業を行うことを決定。

事業では、消費者交流を行う牧場のネットワーク組織である本会の強みを活かし、子どもたちの食といのちの学びを支援するとともに、「心の傷を癒す」ことを第一の目的として掲げ、小学校への出前授業を実施。

小学校に向かうまでの光景や子どもたちとの交流のなかで、目を覆いたくなるほどの大きな被害があったことを痛感したが、体験を通し子どもたちの目には輝きが戻り、体験が終わる頃には笑顔で我々を送り出してくれた。

この活動はニュースやTV番組、地方紙などで取り上げ・紹介され、会の存在を広めるきっかけとなった。

●これまでのもーもースクール開催実績一覧



年度	25			24				
和暦								
西暦	2013			2012				
月	12	11	10	1	12	11	10	
内容	●「クラブ・ユース検討会議」開催	●PRパンフレット（現行）作成	●「ワールドデイリーサミット（横浜）」参加	●ホームページリニューアル	―政権交代（民主党→自民党）―	●「衛生管理区域への立ち入りの制限サイン」作成	●フェイスブックページ立ち上げ	―飼料価格高騰―

■PRパンフレット（現行）作成

新規会員獲得のためのパンフレットを新しく作成。2万部印刷し、関係団体に配布・新規加入の勧誘をいただくよう依頼した。

■ホームページリニューアル

酪農や牛乳乳製品に興味を持つ消費者と会員酪農家の橋渡しをするため、消費者に酪農を紹介するコンテンツを強化したホームページにリニューアル。

■「ワールドデイリーサミット（横浜）」参加

世界各国から酪農関係者が一堂に会し、酪農・乳製品に関する最新の研究発表などが行われる「ワールドデイリーサミット」が横浜で開催され、会員への積極的な参加を促し、世界の酪農乳業関係者との交流を図った。また、本会の存在をアピールするため、英語版の紹介チラシを作成し、中央酪農会議が出展したブースで配布した。

■「衛生管理区域への立ち入りの制限サイン」作成

飼養衛生管理基準の変更に伴い、衛生管理区域を他の区域と区分するためのサインを作成。増加する海外からの観光客が会員牧場に訪れた際の対応を支援するため、衛生管理区域への立ち入りを制限する旨の英語のサインも作成し、ホームページにて公開。

■フェイスブックページ立ち上げ

会員同士の情報交流の迅速化・効率化のため、会員間でのSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の活用を推進すべく、本会のフェイスブックページを立ち上げ、会員の活動情報発信に対して支援を行っている。現在では、多くの会員の情報交換・交流の場となっている。

年度	和暦	月	内容
	26	4	ー消費増税（5%→8%）ー
	26	5	●3つのスローガン策定（代議員会）
	26	11	●東北復興支援事業4か年の取組報告（全国研修会）
	26	12	●クラブ・ユース事業・第1回勉強会開催
	27	3	●全国段階の専門部会活動（交流・製造・広報）の廃止にともない交流・製造の担当理事廃止、新たにクラブ・ユース担当理事を選任 ●ブロック活動強化費導入
	27	5	●手洗い看板・立ち入り禁止看板（中酪作成）活用
	28	4	ー規制改革会議が、生乳流通改革の提言を取り纏めー ー熊本地震発生ー
	28	11	●「ブロック代表者研修会」開催
	28	2	●熊本県での第1回目の復興支援事業実施（熊本市立帯山西小学校）（九州生乳販連主催）

■クラブ・ユース事業・第1回勉強会開催

東京大学にて第1回目の勉強会（若手の集い）を開催。クラブ・ユース代表たちの意向から、会員のみならず酪農を志す大学生にも参加を呼びかけ、54名が参加。学生も含めた5名の参加者より活動事例発表の後交流会を実施。若手会員同士だけでなく、学生との横の繋がりも構築された。

■ブロック活動強化費の導入

クラブ・ユース事業や専門部会研修など、ブロックの実態に応じた活動を企画・実施するとともに、ブロック活動等への会員の積極的な参加を促すために、「ブロック活動等強化費」を地域活動費に新設。

■「ブロック代表者研修会」開催

酪農情勢に関する幅広い知見を得ることと各ブロックの活動情報共有を目的に、理事を対象に愛知県で研修会を開催。指定団体制度の重要性や、東海地域の酪農をめぐる情勢等について講演、牧場視察を行った。

■3つのスローガン策定

本会の目的を改めて認識し、本会の活動を全会員に分かりやすく共有するため、簡潔な表現で「スローガン」を掲げることとした。スローガンの内容は理事会等で協議され、平成23年に始めた「東日本大震災復興支援事業」を会として継続していくことや、平成25年に新たに「クラブ・ユース事業」が始まったことで「後継者の育成」を活動視野に入れる（平成26年度）ことなどを踏まえて検討され、第15回代議員会にて決定。

①つなぐ――全国的なネットワークを活かした相互研鑽や交流
②続ける――酪農教育ファーム等の社会貢献活動
③育てる――酪農後継者と酪農理解者の育成

■手洗い看板・立ち入り禁止看板活用

補助事業を活用し、酪農体験牧場に対する防疫対策及び食中毒事故防止対策として中央酪農会議が「手洗い看板」及び「立ち入り禁止看板」（日本語、英語、中国語、韓国語の4カ国語併記）を制作。全会員に配布し活用した。

■熊本県での第1回目の復興支援事業実施

平成28年4月に発生した熊本地震により、県内の多くの学校が避難所となった。そんな学校へ支援したいという意見が理事会で出されたことから、「熊本市立帯山西小学校」にてもーもースクールを開催することとなった。開催にあわせ、被災者への支援を積極的に行った同校の森江校長より、地震発生当時の様子についてご講演をいただいたことで、こどもたちの気持ちに寄り添った体験が出来た。

トピック②

■クラブ・ユース事業のあゆみ

平成24年度、本会の会員後継者同士の交流の場となりうる「クラブ・ユース事業」の開始について検討をはじめた。

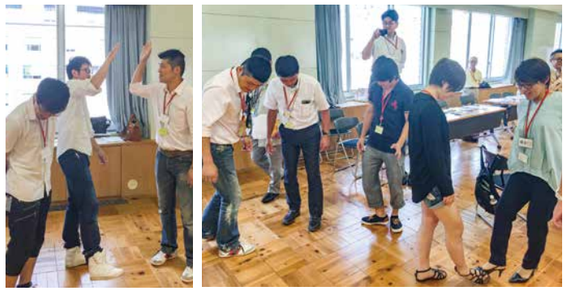
事業を開始するにあたり、まず、活動の主体となる若手の意見を聞くため、平成25年12月にクラブ・ユース検討会議を開催。各ブロックの推薦者及び会長・副会長、交流部会長による意見交換を実施し、若手としてチャレンジしたいこと、会長や副会長が若手に期待していることなどを協議。

事業は、地域ブロックから選出された「クラブ・ユース代表」が主体となって計画・実行し、担当理事が監督を務める形で運営されるようになる。平成26年12月には東京都内にて、第1回目の勉強会「若手酪農家の集い」を開催。以降、年に2回の推進会議と、年に1～2回の勉強会を継続して開催している。

クラブ・ユース検討会議の様子

第1回「若手酪農家の集い」の様子

第２回「若手の集い」の様子



クラブ・ユース事業の成果

平成29年度には、その活動の成果が取りまとめられ、同年の代議員会にて報告された。

具体的な成果としては、「参加した学生が牧場実習に来た（10件）」「交牧連への入会につながった（9件）」「就職や就農につながった（6件）」「パートナーを見つけた（2件）」などが報告され、事業の成果が確認された。

■参加した酪農家の感想

●参加者同士の距離が近くて、コミュニケーションが取りやすかった。
●たくさんの人と話す場面がありよかった。
●学生さんに、酪農の事を聞かれるのは自分のためにもなった。

■参加した学生の感想

●将来の就職先への不安が解消された。
●色んな地域の色んな年代の方と話が出来て、学校では聞けないことが学べた。
●短い時間でとても濃い内容でした。

これまでの勉強会（若手の集い）開催実績一覧

NO	和暦	開催日	名　称	会　場		参加者
1	H26	12/9	「勉強会と大望年会」	東京都	東京大学弥生キャンパス	53
2	H27	7/12	「酪農って良いな!!魂談会」	東京都	農林水産省7階講堂	53
3	H27	12/6～7	「らくのうサミットin熊本」～酪農って素晴らしい～	熊本県	阿蘇ミルク牧場等	71
4	H28	7/7～8	「らくのうサミットin青森」	青森県	ABITANiA ジャージーファーム	63
5	H28	12/4	「らくのうワールドカフェ」	東京都	大妻女子大学 千代田キャンパス	87
6	H29	6/7～8	「らくのうサミットｉｎ北海道」	北海道	新嵐山荘、カントリファーマーズ藤田牧場	86
7	H29	12/3	「らくのうサミットｉｎ東京」	東京都	東京農業大学世田谷キャンパス	79
8	H30	12/2～3	「らくのうサミットｉｎ愛知」	愛知県	名古屋都市センター、愛知牧場	92
9	R1	12/1～2	「らくのうサミットｉｎ新潟」	新潟県	新潟大学駅南キャンパスときめいと、(有)フジタファーム	59

地域ブロック活動の紹介

年度	和暦	月	内容
	29	2	●クラブ・ユース事業成果とりまとめ
	30	4	ー改正「畜産経営の安定に関する法律」施行ー
		9	ー北海道胆振東部地震発生ー
		9	●「酪農教育ファーム20年の節目の記念シンポジウム」協力
		12	ーTPP11発効ー
		2	ー日欧EPA発効ー
		2	●「20周年記念事業第1回検討会」開催
		3	●防疫ポスター作成
	31	4	ー飲用乳価値上げ、牛乳小売価格改定、「なつぞら」放映スタートー
	令和元年	5	ー改元（平成から令和へ）ー
		9	ー台風15号上陸ー
		10	ー消費増税（8%→10%等）ー ー台風19号上陸ー
		10	●「20周年記念式典」開催 ●ホームページリニューアル
		1	ー日米貿易協定発動ー
		3	●「20周年記念誌」発刊

西暦：2017（29）、2018（30）、2019（令和元年）

■「20周年記念式典」開催

平成31年度に本会設立から20年の節目を迎えることを踏まえ、令和元年10月24日に北海道釧路にて記念式典を開催。年表で日本酪農をめぐる情勢と共に本会の活動の歴史を振り返った。

改めて本会の役割や重要性を再確認し、これからも活動を続けていく思いを参加者全員で共有。会員同士の繋がりがより一層強固となる式典となった。

■防疫ポスター作成

口蹄疫の発生から8年が経過したが、近隣国では継続して発生が確認されており、我が国への海外旅行者が増加傾向にある中、今一度防疫体制の強化を図るため、牧場に来場する消費者への啓発として、防疫ポスターを作成し全会員に配布した。

■酪農教育ファーム20年の節目の記念シンポジウム協力

平成30年度に酪農教育ファーム活動が本格的に取り組まれてから20年の節目を迎え、これを記念してシンポジウムが開催された。本会は酪農教育ファーム活動の実践者でもあり、活動当初から協力してきたため、全会員に案内しシンポジウムへの参加を積極的に募り、本会から57牧場63名が参加し、シンポジウムを盛り上げた。

北海道ブロック

北海道ブロックは、一番端にある会員牧場から反対側の一番端にある会員牧場までの距離は640kmぐらいあります。ですので、全会員が集まるのはなかなか難しいのですが、年2回の総会や“エリア別”と称した地域ごとの集まりに併せ、工夫を凝らした研修会を実施したり、会員牧場への訪問などを行い研鑽と交流を深めています。また、クラブ・ユース活動も平成28年度から開始し、毎回好評な内容で学生に対する酪農業界への招致や、新規会員獲得に一役を担っています。

平成30年度 第3回北海道クラブ・ユース

ソーセージ作り体験

東北ブロック

東北ブロックには、法人化している企業的な牧場や、家族経営の牧場、農業高校など、様々な会員が所属しており、お互いの立場を理解しあいながら協力して活動をしています。

東日本大震災以降は、被災地での酪農体験を実施するほか、研修会を開催し、会員牧場の視察や、チーズ作り、酪農教育ファームなどを勉強しています。

特徴的な活動として、酪農教育ファーム東北地域推進委員会と連携して高校生にも酪農体験で活躍してもらうため、会員の農業高校での研修「ジュニアファシリテーター研修」を実施しており、研修後は酪農体験でスタッフとして参加していただいています。

平成28年度 チーズ作り研修会

平成28年度 もーもースクール in 岡田（宮城県）

関東ブロック

設立当初からブロックで行っていた「わくわくモーモースクール」への協力や、NHKイベント「ふるさとの食　にっぽんの食」への出展をはじめ、チーズやジェラートの製造研修会、消費者交流研修会として会員牧場の視察を行ったり、学生との交流会として「酪農の仕事セミナー」を開催するなど、様々な活動を実施しています。活動を通じて、世代を超えた酪農家同士のつながりや、酪農を志す学生達、そして新たな交牧連の仲間とのつながりが広がり、より活動が活発になっています。

NHKイベント「ふるさとの食　にっぽんの食」

平成30年度「学生との交流会」

北陸ブロック

特徴的な活動として、平成28年に他ブロックに先駆けて、クラブ・ユース活動を開始し、過去3回の研修会を実施しました。カフェのようにリラックスした雰囲気で自由に話し合う「ワールドカフェ」の形式で、学生や酪農を志す若者と会員が勉強や交流をしています。北陸地域は落ち込んでいく生産体制を再構築することが急務のため、若い世代に酪農を伝え続け、新規就農者を生み出していきたいと考えています。

平成30年度 第3回クラブ・ユース「ディリー・ワールドカフェ」

ラブリー牧場視察

■地域ブロック同士の交流も積極的に実施

ブロックを超えた会員同士の交流を目的に、他ブロックに対して研修会の参加者を募ったり、他ブロックの会員牧場を視察するなどの企画も行われています。またブロック合同で研修会を開催しているブロックもあり、酪農家の全国ネットワーク組織としての特性を生かした幅広い活動が積極的に行われています。

平成30年関東・東海ブロック合同研修会
松下牧場（静岡県）視察の様子

令和元年近畿・中国・四国ブロック
オオヤブデイリーファーム（熊本県）視察の様子

東海ブロック

東海ブロックでは、1泊2日等遠方の研修会には参加しづらい会員が気軽に参加できるように、近隣の牧場等を視察する「ミニ研修会」を年に2～3回開催しています。近年は全国や地域ブロックでも「クラブ・ユース活動」が盛んになっていますが、親世代の会員で「親父の会」を作り交流しています。親子間の仲が良く、活動のお手本となる会の発足当時からの会員もおり、素晴らしい仲間たちと共に活動しています。また、指定団体の理解と協力により、円滑に活動を続けられています。節目節目で原点に戻り、親世代の経験と、ユース世代の時代に沿った活動で、今後も頑張りたいと考えています。

ミニ研修会

近畿・中国・四国ブロック

近中四ブロックでは3つのブロックが1つになり活動を行っています。活動範囲は広いですが、毎年開催府県を変えるなど工夫して、製造・流通・交流専門部会での研修、クラブ・ユース活動などの活動を行っています。全国事業である全国研修会や、東北や熊本における震災復興支援事業にもブロックから積極的に参加しています。特徴として、活動には後継者世代の若手会員も積極的に参加しているため、世代間の交流を行うことができています。新規会員も毎年加入しており、年々賑やかになっています。

平成30年度 第牛乳を使った料理研修

平成30年度 第3回クラブ・ユース IN 六甲山牧場

九州ブロック

平成22年に口蹄疫が発生。平成28年には熊本地震が発生し、いずれも大きな被害がありました。被災した会員もいましたが、被害を乗り越え会員同士がより協力し合い、前向きに活動を行っています。

特徴的な活動としては、酪農教育ファーム活動と連携し教員対象の酪農体験を行うほか、熊本地震以降毎年被災した小学校で酪農体験を開催しています。口蹄疫発生の経験から、交流活動では防疫対策を厳重に行っています。

平成30年度 教員対象酪農体験

熊本復興支援もーもースクール

今後の10年に向けた宣言

交牧連設立20年の節目を迎えるにあたり、「20周年記念式典」を開催した。式典の締めくくりに「今後の10年に向けた宣言」が若手会員である小林拓氏（島根県・小林牧場・近中四ブロッククラブ・ユース代表）より読み上げられた。

地域交流牧場全国連絡会は、日本酪農に対する理解・支援の獲得を目的として、平成11年7月に、酪農家自らにより設立されました。

このたび、設立20周年を迎えるにあたり、ここに20周年記念式典を開催し、本会のこれまでの活動実績や会員同士の繋がり、そして指定生乳生産者団体をはじめとした関係者との協力関係を改めて認識しました。

これを節目に、さらなる10年に向けて本会をより発展させるべく、宣言致します。

一・「日本酪農の魅力や意義を伝えたい」という思いを強く持ち、各地域で行う酪農教育ファーム活動、自家製乳製品の製造販売などを通じ、日本酪農の理解醸成を図り続けます

一・この20年間で築き上げた会員同士の絆を、熱い気持ちで未来へ繋げます

一・変わりゆく酪農情勢を踏まえ、活動に創意工夫を凝らし、本会のさらなる発展と周知に取り組みます

一・会員の一人ひとりが酪農の仕事に誇りを持ち、努力し続けることで、子どもたちが憧れ、地域に求められる酪農家を目指します

以上、宣言します。

令和元年10月24日

地域交流牧場全国連絡会
20周年記念式典

編集後記

設立当時に130会員だった会員数が、現在は313会員（平成31年5月）となった。国内の酪農家戸数が減少する中でも、本会の会員数は維持されており、現在では全国の酪農家のおよそ50戸に1戸は交牧連の会員という計算になる。

会員数増加の背景には、地域における会員の積極的な声掛けや、会員募集チラシを作成し地域の研修会で配布するなどの広報の取り組みを行ってきたことがある。また、ホームページに会員募集や活動報告のページを作るなどの取り組みも行っている。

近年は全国研修会やクラブ・ユース事業など、交牧連の会員外の酪農家にも積極的に研修会の案内をするなど、地域の酪農家を巻き込んだ企画にすることで、それをきっかけに入会に繋がった例もある。

今後、さらなる国際化や、頻発する災害、後継者不足など、厳しい酪農情勢の中で、消費者への「日本酪農に対する理解や支援」の獲得はより一層重要となる。そのため、活動に共感する仲間を増やし、ますます活発な活動にしていくとともに、会の存在を業界内外でさらに知ってもらい、評価されるような会であるよう、会員一丸となって取り組む必要がある。